

第6編 会社・商店・料亭・組合など

第1章 マッチ箱のラベル

猿橋の町には郡役所・警察署・登記所・甲斐絹組合などが集中し、会議・陳情・歎願など様々な目的で郡内・県内から集まって来る客が多く、それらの人々を相手にする旅館・料亭・料理屋・人力車屋・芸者置屋なども多く立地して北都留第一の繁華な町であった。

また遊郭もあったとされるが、どこにあったかは定かでない。

大正期の地図で、これらのサービス業に関する店をピックアップすると次のようになる。特に横町と仲町に多く集まっていたことがわかる。

霞町：ももくら（カフェ）

東町：小松屋（旅館）・なぎさ（料理屋、カフェ）

横町：大黒屋（旅館）・魚三（大黒すし）・小田切（人力車）・魚由（？）・大正館（飲食店）・佐藤（うどん店）・魚三（料理屋）・杉本（芸妓屋）・花月（料理屋）

仲町：魚利（料理屋）・須加屋（魚）・大西（料理屋）・魚春（魚）・花月（料理屋）
松風軒（食堂）・小糸（芸者屋）・水明楼（料亭）

寿町：角屋（飲食店）・坂下屋（旅館）・秋山（うどん店）・永楽屋（出前）

小柳：安藤うどん店・萬屋料理屋・東亭（料亭）

この時代、それぞれの店が特製マッチを配布していた。このラベルを蒐集していた方からのコレクションが提供された。今となってはどこにあったか分からぬ店も多い。

図6101 マッチ箱のラベル

（西室美津子さん提供）





第2章 料亭・旅館

1) 大黒屋旅館

大黒屋旅館は「名橋：さるはし」が目の前という絶好の立地条件で、江戸時代から猿橋では代表的な旅館だった。昭和の新猿橋架橋で用地が約半分になってしまったため、橋畔の建物は食堂・土産物店となり、旅館は横町の表通りに移転した。

図6201 明治時代の大黒屋

(日立製作所史より)



図6202 「国定忠治の定宿」を売物にした大黒屋

大正時代（絵葉書）

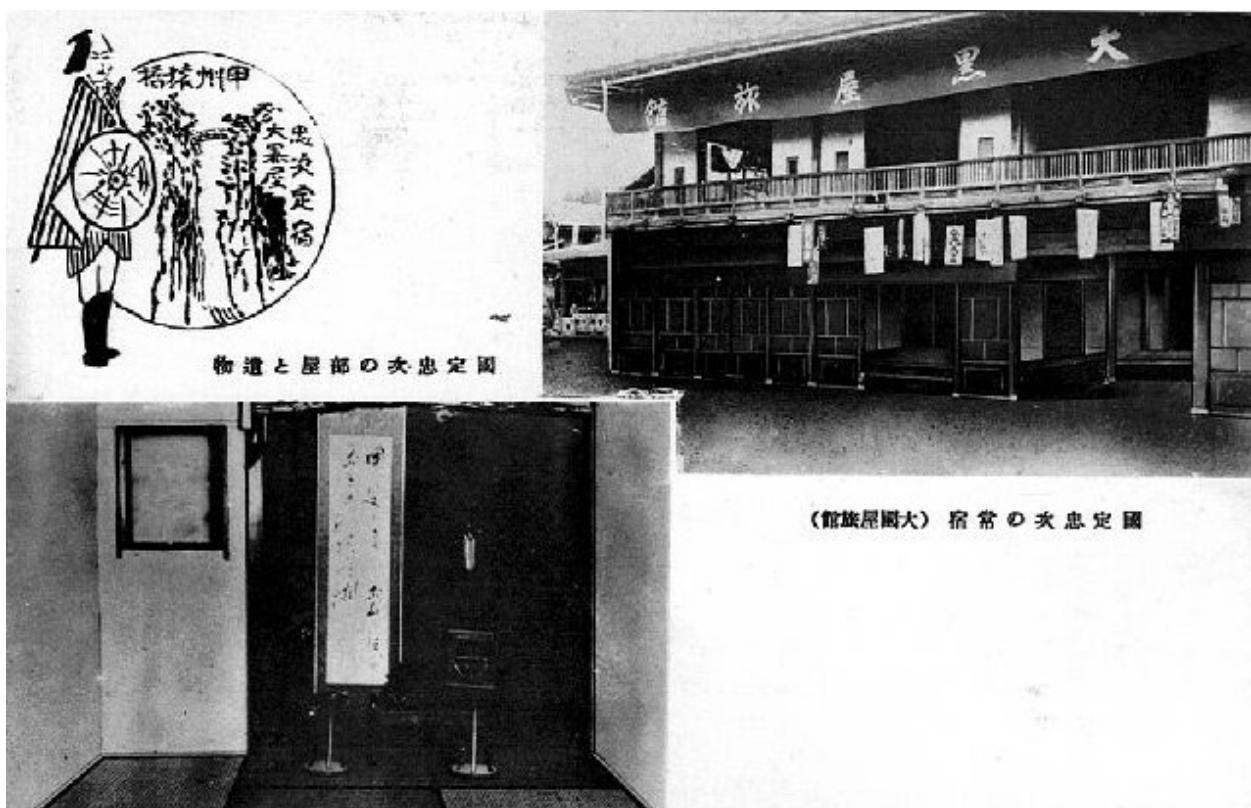


図6203 大正時代の大黒屋 大正11年の広告

自動車部を設けて、旅客の送迎を行っていた。

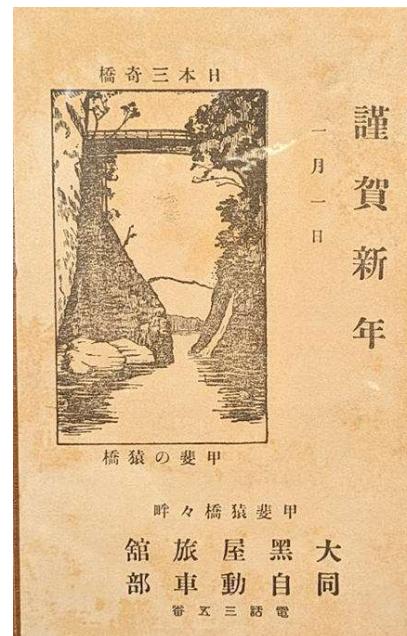
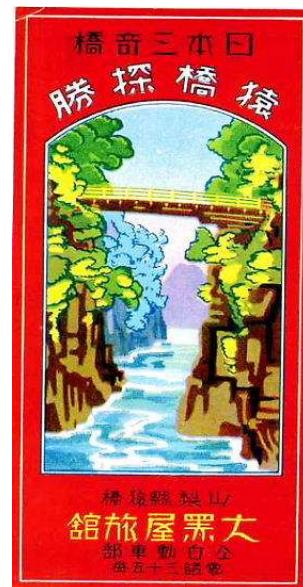
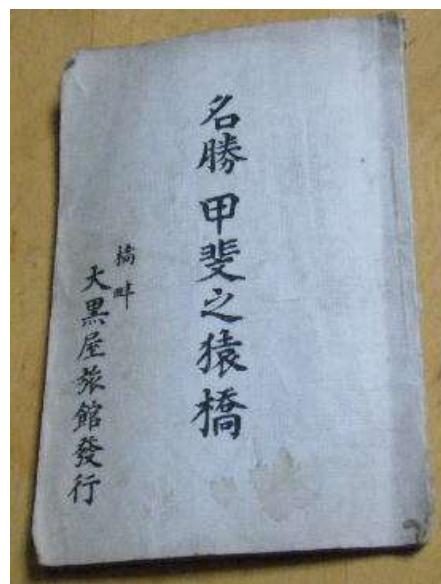


図6204 宣伝パンフ



大月を経ないで富士山麓へ行くことができるといった「誇大広告」もある。

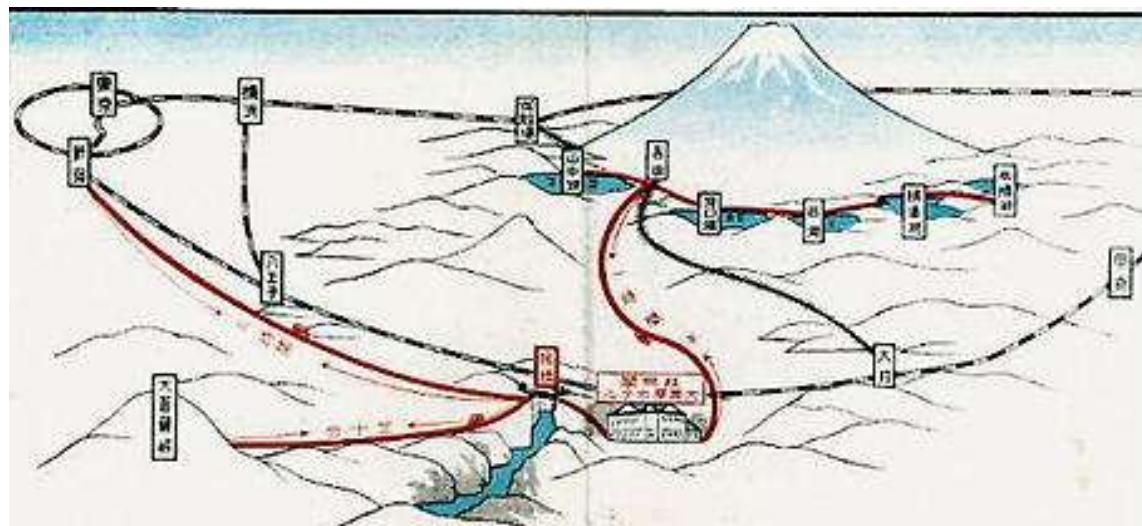


図6205 昭和8年の新猿橋架橋で用地が半減した大黒屋



図6206 大黒屋旅館イメージ図

新さるはし架橋で敷地が半減した大黒屋は、橋畔の建物は食堂・土産物屋とし、新たに横町通りに旅館を新築した。この写真が入手出来ていないので、記憶を頼りにA1で描いたイメージ図が下図。

実際の写真入手したら差し替え



図6207 外国人客向けの食事メニュー（一部）



図6208 昭和40年代の大黒屋（食堂・土産物屋）

富士五湖・甲府方面に向かう観光バスの途中停車で大いに賑わった橋畔の大黒屋



2) 桂川館

桂川館（けいせんかん）と聞けば、大月駅前の旅館と思う人が多いだろうが、もとは猿橋駅前にあった。猿橋駅はその当時、始発駅・終着駅でもあり、下の時刻表のようにホーム上の洗面所（○マーク）や駅弁販売（弁マーク）もある駅だった。

これらの乗降客を目当てに大正5年（1916）に落合熊雄氏が駅前に開業した。後に地域の中心が大月へ移っていったため大月駅前に移転開業した。

図6209 大正13年時刻表（一部）

●	○	八	王	子	寶發	27.0
淺	與	上	四	鳥	川瀬原津澤橋	30.6
田	下	四	鳥	野	月狩子野沼山部和	36.5
田	下	四	鳥	鹿	大	41.0
田	下	四	鳥	下	初	43.6
田	下	四	鳥		征	48.0
田	下	四	鳥		初	50.6
田	下	四	鳥		勝	52.2
田	下	四	鳥		鹽	55.9
田	下	四	鳥		日	59.8
田	下	四	鳥		石	63.5
田	下	四	鳥			67.1
田	下	四	鳥			69.6
田	下	四	鳥			72.9
田	下	四	鳥			76.4
田	下	四	鳥	甲	寶發	80.3
田	下	四	鳥	萬	著發	89.7

図6210 当時の弁当包紙



図6211 猿橋駅前の桂川館



図6212 桂川館前で記念写真



図6213 駅弁と名物「桃太郎餅」の包装紙



3) 水明楼

水明楼は繁華な町の中心、仲町にあった料亭である。明治29年頃、信州上田藩士だった手塚敬三郎氏が幡野家の隠居所(別荘)を借りて開業し、その後増築して下の写真のような料亭にした。

図6214 戦前の水明楼



図6215 昭和30年代の水明楼



図6216 焼き印



第3章 会社など

1) 第十銀行猿橋支店 県内唯一の支店

まだ新猿橋が架かっていない明治・大正期、さるはし橋畔の猿橋警察署の隣りに第十銀行の猿橋支店があった。

第十銀行は、明治10年（1978）第9番目に設立された国立銀行。本来なら「第九国立銀行」となったはずであるが、「九」が「苦」に通じるということで忌み、「第十銀行」という名称になったという。第二次大戦中、「一県一行」の国の指導で昭和16年に有信銀行と合併して山梨中央銀行になった。

第十銀行50周年記念誌（国会図書館蔵）によれば、猿橋支店は東京支店の次に開設された支店で、明治12年4月15日猿橋55番地（猿橋警察署と大黒屋の間）で営業開始した。

この支店は明治32年に竜王支店が開設されるまで約20年間、県内唯一の支店だった。その後も長い間、郡内唯一の支店として地域産業の発展に貢献した。因みに大月支店の開設は47年後の大正14年（1925）である。

図6301 橋畔にあった猿橋支店

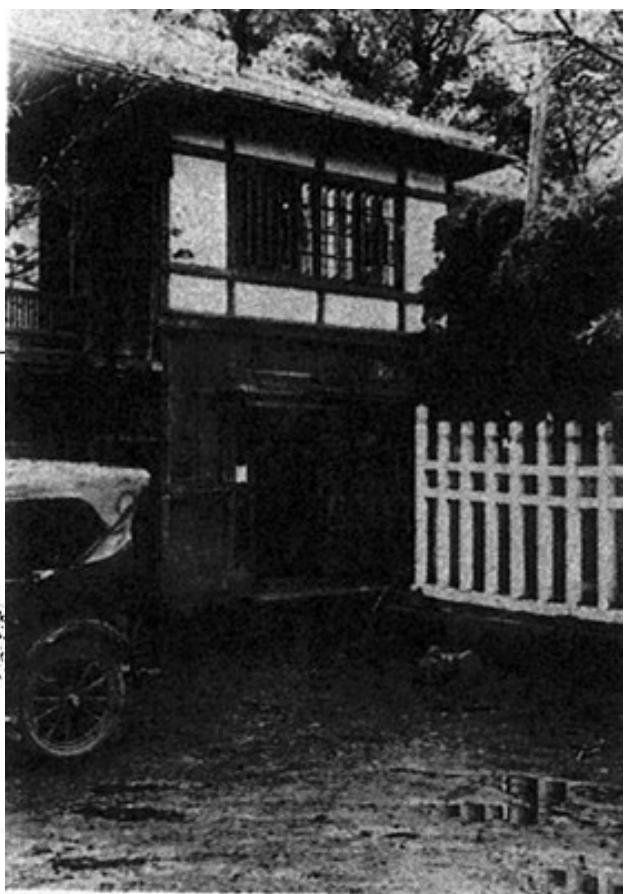


図6302 大正期の地図



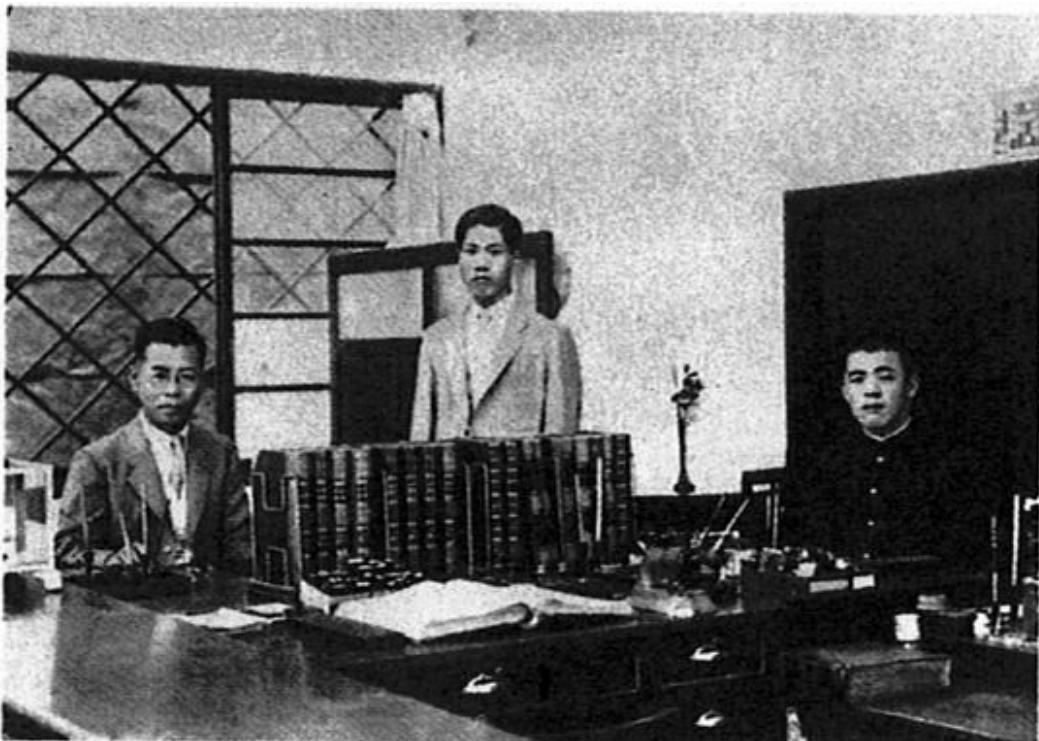
昭和8年、新猿橋の架橋で警察署とともに立ち退きとなり、電信局があった寿町の猿橋153番地（現在地）に新築移転した。

昭和30年代に我々が見ていた石作りの重厚な建物の写真は残念ながら発見されていない。

図6303

昭和30年代の建物の写真募集中！！

図6319 寿町に新築移転した時の内部の写真。



猿橋支店内の行員 (昭和10年)

図6304 その後、建て替えられた建物



更に建て替えがあり現在の建物（第4代）になっている。

2) 都留電燈株式会社

郡内最大の企業である都留電燈株式会社という会社が猿橋に存在した。駒橋発電所で発電した電力を北都留郡・南都留郡に供電し、必要な電気器具を販売していた。

戦後は新猿橋南の富士急バスの営業所・車庫があった場所である。

図6305 都留電燈の所在地



図6306 本社正面

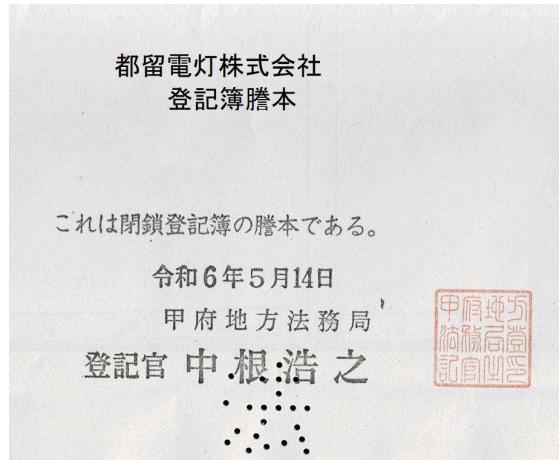


図6307 役職員記念写真

網野氏 提供



図6308 本店は小柳町の旧猿橋小学校近く「猿橋 199 番地」に登記



・商号	都留電燈株式会社
・本店	北都留郡大原村猿橋 199 番地
・支店	北都留郡上野原町 3282 番地
・目的	電燈および電力を供給し、電気工事の請負ならびに電気機械器具の販売
・設立年月日	大正2年8月24日
・資本の総額	10万円
・一株の金額	12円50銭
・取締役	社長 藤田胸太郎（上野原町） 小林龜麿（初狩村）

図6309 A1で描き出した都留電灯本社のイメージ図



第4章 商店など

1) 猿橋活版所 吉川書店

図64〇1 少年雑誌の幟が立つ吉川書店



図64〇2 当主吉川実治

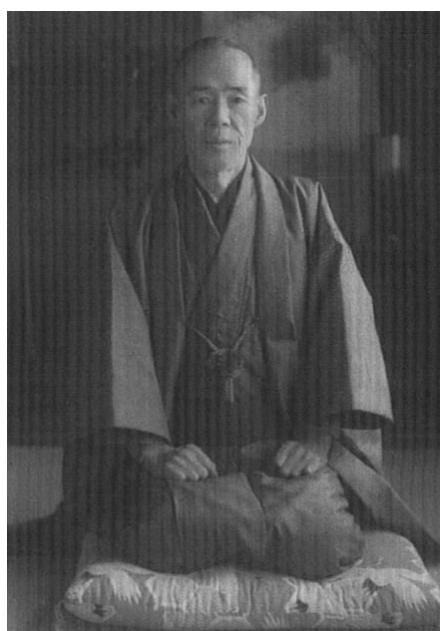


図64〇3 吉川秀雄出征記念写真



2) 酒の大布屋

大布屋は「清酒真澄」で有名な長野県諏訪の酒蔵「宮坂醸造」直営の酒屋だった。

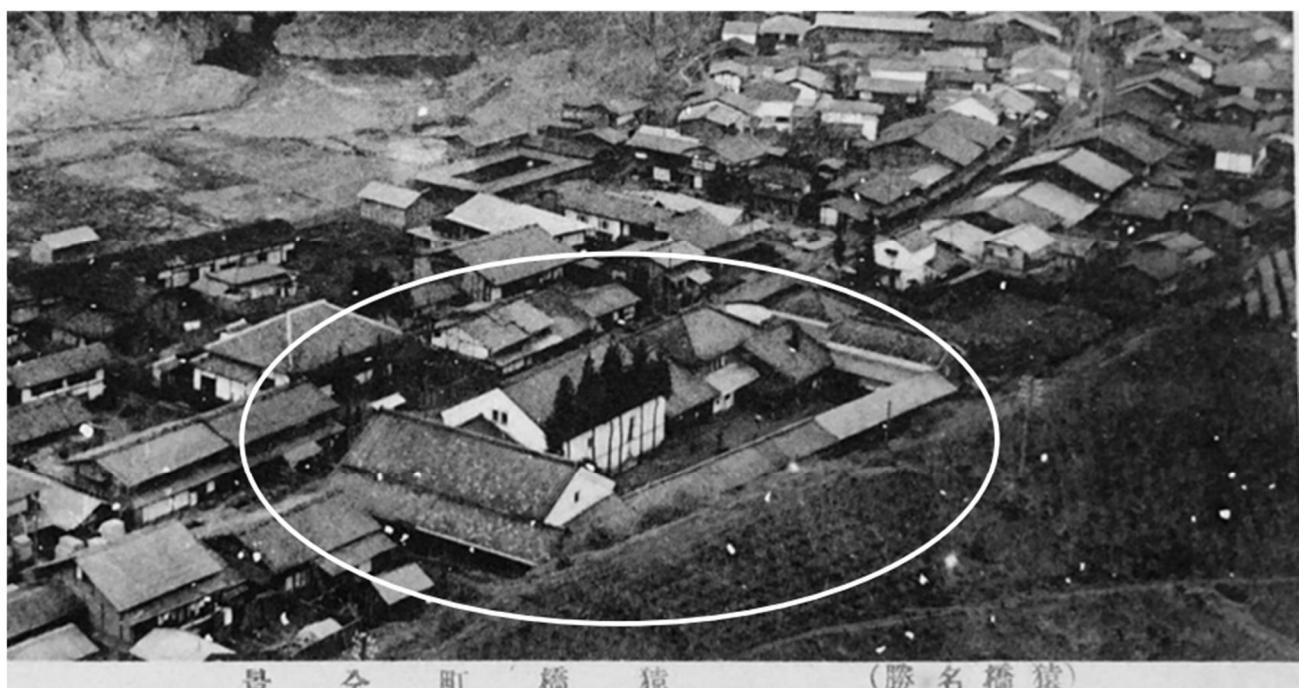
宮坂醸造：宮坂家は江戸初期の寛文2（1662）、信州上諏訪で酒造業を創業、大布屋を屋号として嘗々と酒造りを続け、大正5年（1916）には味噌・醤油の製造販売も開始した。後の神州一味噌である。

大正8年（1919）、猿橋にあった酒造工場を天野氏から買収し、猿橋営業所として酒・味噌・醤油の小売を始め、その後味噌を醸造した。

現在、富士急バス営業所となっている広大な土地に、店・倉庫などの複数の建物からなる大布屋は、猿橋町全景の絵葉書でもその威容がわかる。

図6404 大布屋全景

（絵葉書 猿橋町全景より）



昭和32年（1957）猿橋営業所を閉鎖することになり、当時東京都中野区にあった宮坂醸造味噌工場（神州一味噌、工場は2016年閉鎖）に勤務していた清水愛治氏が宮谷の出身であったことから、なじみのある猿橋の店舗を「のれん分け」の形で引き継ぎ、新たに「大布屋」を開業した。

当時の店舗は広い土間を有し、山王宮祭の宵祭りの晩などは“大人神輿”が、店舗を「御神酒所（みきしょ）」として使い、担ぎ手の若い衆が酒を酌み交わす姿が見られたという。

現在の大布屋（店舗・住宅）は、宮坂醸造時代に隣接していた谷村裁判所大原出張所（登記所）跡地に建ち、愛治氏の子息清水明愛氏が「酒の大布屋」に発展させた。

図6405 往時の大布屋倉庫（国道20号沿い）



昭和30年代に見ていたあの大きな倉庫二棟は、諏訪市の宮坂醸造丸高工場へ移築したという。

図6406 現在の富士急営業所、その奥に大布屋



3) 仁科薬局

仁科薬局は、考古学者としても知られる強瀬（こわぜ）出身の仁科義男氏が明治薬学校卒業後猿橋に開業した。

大正7年当時とされる水嶋氏の地図ではなく、大正11年の地図に初めて記載されているので、大正8～10年（1919～1921）頃の開業とみられる。

戦後、仁科薬局は田中屋呉服店の右隣にあったが、下の地図ではもっと東よりにあった。この店が昭和15年5月の猿橋大火で延焼したため、我々が知る場所に移転したのだろう。

義男氏は後に猿橋幼稚園を設立、初代園長に就任したため長男の義人氏が薬局を引き継いだ。

図6407 大正11年の地図（一部）

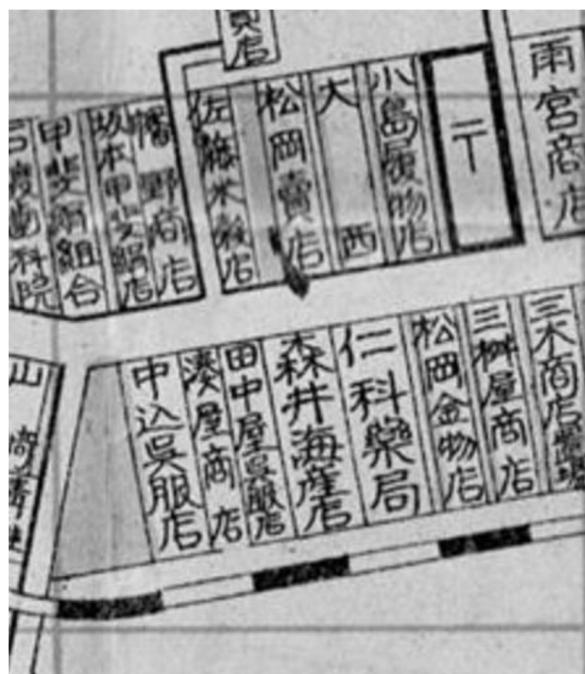


図6408 看板



図6409 大正11年当時の仁科薬局



4) 梅沢薬局

横町通りに古くからある梅沢薬局は、もともと字梅沢（心月寺近辺の旧字名）に住んでいた大野家が武右衛門の時代（明治中期）、猿橋に「梅沢」の屋号で開業したのが始まりという。二代目当主の大野亀太郎は明治41年（1908）から45年まで約5年間、大原村村長（第13代）を務めている。

図6410 明治期の猿橋絵図（横町部分 一部）

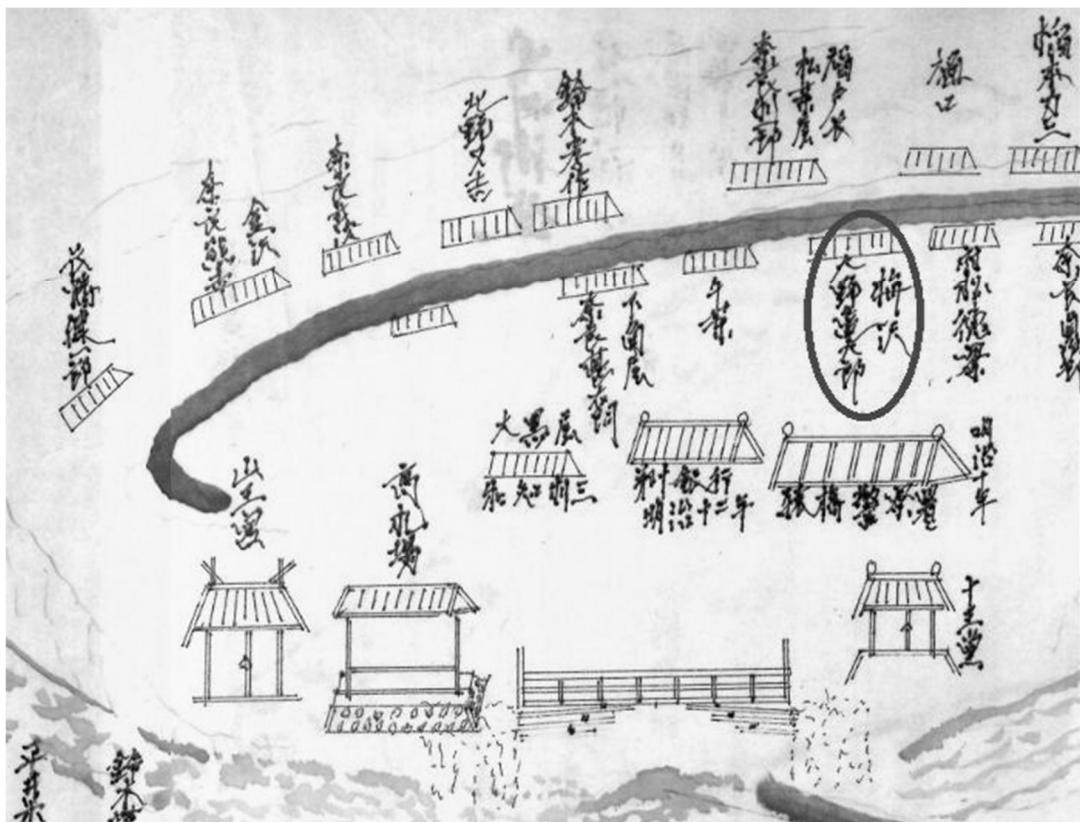


図6411 明治19年の広告

「甲州道中 各家商業便覧」



図6412 13代目村長

「大野亀太郎氏」



5) 耕牧舎

まだ猿橋小学校が小柳町にあった頃、近くに「耕牧舎」あるいは「落合牛乳店」という牛乳屋さんがあった。単なる牛乳販売店ではなく、乳牛を飼育しての本格的な牛乳店である。大正後期の町並図にも「落合牛乳店」とある。

図6413 大正11年 地図



この「耕牧舎」は明治期に勃興した箱根の耕牧舎の流れを汲む。明治 13 年 (1880) 渋沢栄一氏らの発起によって箱根仙石原に創立した牧場。

実際の経営は栄一の従弟である須永伝蔵があたり、乳牛の飼育は順調に立ち上がったが、避暑地箱根の牛乳需要は夏季だけで、冬季には牛乳が余ってしまい単一拠点での経営は難しかった。そこで明治 15 年、東京根岸（後に日暮里へ移転）に第二牧場を作り、箱根と東京の二拠点体制とした。

この東京の牧舎の管理運営を任せられた新原敬三という人物は、何とあの芥川龍之介の実父。山口県から上京し、下総牧羊場（御料牧場）で酪農技術を会得し、知己を得て耕牧舎に招聘されたという。龍之介はここで生まれた。

新原氏は商才を發揮して大いに東京耕牧舎をもり立て、外国人居留地や帝国ホテル・精養軒などに販路を広げ、他の牧場も買取り事業を拡大させた。

箱根の耕牧舎はこの東京の拠点以外に小田原・谷村・猿橋に支舎を持っていたが、本体の経営が思わしくなく、それぞれと支舎と「耕牧舎牛乳店年賦売渡契約」を結び、資産・ブランドをすべて支舎に売り渡した上で精算し解散となった。明治中期のことと思われる。

猿橋支舎は耕牧舎グループで搾乳業を学んだ落合熊次郎氏が譲り受け「猿橋耕牧舎」として独立した。昭和 30 年代には落合正三氏に経営が引き継がれていたが、昭和 38 年頃牛舎運営から撤退、森永乳業の製品を商う販売店となった。

創立 101 年にあたる平成 2 年 (1990) 1 月に閉店したという。創立者の落合熊次郎氏は猿橋駅前にあった旅館桂川館の創業者でもある。

毎日新聞山梨版の「やまなし文学散歩14（平成2年3月）」に、芥川龍之介の山梨旅行の事が書かれているが、この中に猿橋の耕牧舎の事も記されている。内容は前頁とほぼ同じ。

図6414 毎日新聞に紹介された耕牧舎

加藤（旧姓落合）かつ子さん 提供

龍之介はしばしば中央線沿いに旅をしている。実父新原敏三の経営する牛乳販売業「耕牧舎」の牧場が新宿にあり、芥川家自身も明治四十三年から大正三年田端に家を新築するまで新宿の牧場の一角の家を借りて住んでいたので、新宿駅から中央線に乗って旅に出かけるのは身近なことだったのかもしれない。

実はこの耕牧舎の支店は山梨にもあった。大月市猿橋に明治二十二年開業した「耕牧舎落合牛乳店」がそれである。初代の落合熊次郎は、浅沢栄一が経営していた箱根仙石原の耕牧舎牧場に勤めていた。龍之介の

実父新原敏三も仙石原で養育係をしていた。文献では確かめられないが、二人は同僚であった可能性が強い。やがて敏三は東京の支店の責任者となり、明治三十八年には正式に経営権を取得し、芝新錢座の店を耕牧舎本店と称した。一方、落合熊次郎も浅沢から乳牛を譲り受け猿橋に支店を開くことになり、明治三十七年、本家の仙石原の牧場の解散とともに独立した。つまりもともと箱根にあった耕牧舎が、東京や山梨で引き継がれていったのだ。

（K）

「耕牧舎落合牛乳店」は戦後、大手牛乳会社の系列に入ったのを契機に、「耕牧舎」の看板は外されたが、箱根の二子山を模したマークは長く使われていたという。その落合牛乳店もこの一月、開業一百年目で閉店した。現在の主人の落合正三さんはかねがね、百年間は店を継ぎようと思つてきただが、耕牧舎の長い歴史もついに閉じられることになった。この山梨でも意外なところに「耕牧舎」をめぐる物語があったのである。

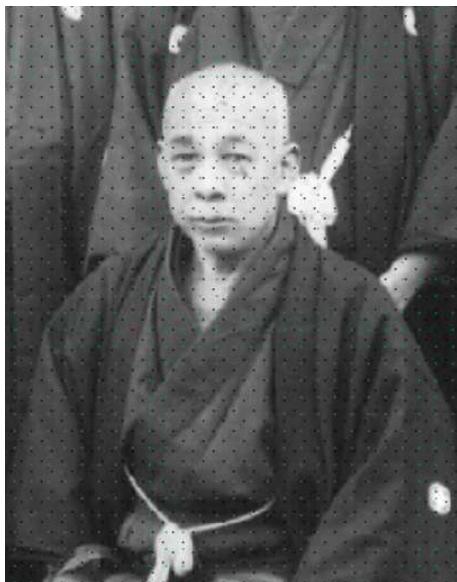


芥川龍之介

6) 一杉木工所

一杉木工所は明治37年（1904）、静岡県駿東郡入山瀬出身の一杉直作（写真：明治9年生）が猿橋に来て建具屋を始めた事に始まる。

直作は静岡県原（現在沼津市）出身の父母のもとに生まれ、父幸七の仕事の関係で西桂に住んでいた時に建具職人となった。



言い伝えによれば、旧甲斐絹同業組合（後に猿橋町役場）の建具を作るために呼ばれてきたというが、この建物の建築時期と符合するのか検証はできていない。

入山瀬で仕事をしている間に土地の素封家である大村家の娘たねと知り合ったが、「隣村まで他人の土地を踏まずに行ける」ほどの大地主であった大村家が建具職人の直作との結婚を許す筈がなく、結局二人は駆け落ちをして猿橋へ来たという。

猿橋では橋畔の61番地で借家、あるいは間借りをして仕事を始めており、この61番地が長いこと我々家族の本籍地となっていた。

図6415 さるはし橋畔の家



志村鉄工所、仁科自転車店、三井屋商店、藤田理髪店などの掲載を勧めるための出稿



その後、大正期の地図によれば、横町表通りの72番地（後に大黒屋旅館があった所）に移っていることがわかる。

昭和8年の新猿橋架橋で、横町近辺は大きな影響を受けており、この時に寿町の坂本甲斐絹店の右半分を借りて転居した。この転居により結果的に猿橋中心部の大半を消失した猿橋大火を免れることができた。

戦後、昭和32年、旧小俣一長組から事務所兼住居の譲渡を受け再度移転した。しかし、その頃から建具は急速に既成品が主流となった。往時は使用人もおり夕食後も「夜なべ」と称して仕事をする程だったが、「誂（あつら）え建具」の需要が急減したため、昭和の末期自然閉業となつた。

7) 桂川遊覧船

猿橋と桂川遊覧のための「桂川遊覧船」があったことは良く知られており、写真もいくつか残っているが、その時期、事業会社などについてはわかっていない。

写真によれば、10人以上が乗ることができる結構大型の船だったようだ。

図6416 遊覧船



第5章 組合

1) 北都留郡甲斐絹同業組合

甲斐絹は郡内の主要産業であった。北都留郡の甲斐絹製造・販売の業者の同業組合本部が猿橋に置かれていた。事務作業だけでなく「取引所」の機能も果たしていた。

経済の中心が大月に移っていく過程で組合事務所も大月へ移転し、建物はその後猿橋町役場として使われた。

図6501 甲斐絹同業組合本部



2) 北都留郡乾繭共同販賣利用組合

図6502 通称「カンケン」の高い煙突

